



なごや「聖歌」だより 8月号'08

わたしのようなのは・・・ NO！ちいさなプラスの積み重ねです。

「私のような者が練習しても、戦力にならないから・・・」と遠慮される方があります。逆に「お祈りなんだから、上手でなくてもいいんじゃないの」と言われる方もあります。

この世の企業やプロの合唱団であれば、才能や素質のある人を選んで集め、それを磨いて業績を上げる、音楽ならばよい演奏を目指すのは当然です。

私たちの目的は「よい演奏」ではありません。聖歌はあくまでも『教会の祈り』です。信徒が神を讃美し、神との交わることです。だから歌いたい方は誰でも参加できます。

では「お祈りだから、どんな歌でもいい」でしょうか。昔から聖歌者はクリロスと呼ばれ、教会の『役職』の一つでした。聖歌を歌うことは奉仕ですが、奉仕であっても、聖職者とともに祈りを進め、参拝者の心を神の方へ向かわせ、また外へ向かって神の国を知らしめる責務があります。革命前のロシアでは音楽的な面が先行し、プロの合唱団を雇うことが当たり前に行われていました。ボルトニャンスキーにしてもチャイコフスキーにしても18世紀19世紀の名曲は高度な合唱技術が要求されます。プロでなくても、質、量ともに本格的な練習が必要です。たとえば戦前のニコライ堂では聖歌隊は週2回ずつ厳しい練習をしていたそうです。

しかし音楽的に高度であることが「よい聖歌」の絶対条件ではありません。ロシアでは今でも、声の質も音程も確かで、あきらかに「プロだな」とわかる上手な聖歌もあります。しかし修道院で修道士や修道女が歌う清楚な聖歌、ちいさな教会で信徒が一生懸命歌うシンプルな聖歌は技術的には劣っている面もありますが、心が浄められるようでした。

では私たちは、どこを目指せばよいのでしょうか。日本正

教会の170年の伝統を継承しつつ、今の教会の状態、聖歌を歌うメンバーの力に応じた選曲、地道な練習を積み重ねていくことが大切だと思います。

ハーモニーの合った合唱聖歌は楽しいものです。四声ならではの華やかさも祝祭の雰囲気にはぴったりです。ですが、革命前のロシアや明治時代そのままでなければならぬということはありません。今の状態、将来の状態を考慮して工夫するのは正教の伝統です。四声であっても音域に無理がなく、状況に合わせてフレキシブルに対応できる聖歌が望ましいでしょう。

単音聖歌にもっと着目したいと思います。単音聖歌は四声が歌えないときの「間に合わせ」ではありません。正教会の聖歌はもともと「単音」です。単音だからこそ祈りのことばに注意を集中し、声を合わせるのが容易です。ぴーんと張った糸のようにそろったユニゾン(斉唱)は、力強く美しいものです。

技術以上に求められるのは、聖歌を祈る姿勢でしょう。目に見えないので忘れがちですが、「聖歌を歌うとき、神の前で歌っている」と教えられています。歌うことばは神の面前での信仰告白です。そう考えると怖ろしくなります。

精一杯努力し、真剣に、教会が心一つに歌うとき、神はこの上ない喜びを、賜物として与えてくれます。そこには聖神が働いています。聖神は生命の喜びを与えます。

教会はハリストスの体です。体を作っているのは私たちひとりひとりです。ひとりの小さなプラスは相乗作用で2乗倍3乗倍のプラスになります。しかし、逆も、また真実です。

伝統聖歌研究会

ズナメニイ聖歌に親しむ

第4回 8月30日(土) 14:00~17:00

講師:イグナティイ代稔

講義内容のまとめはインターネットで見られます。

<http://www.orthodox-jp.com/liturg>

7月は都合により中止しました。謹んでお詫びします。

8月の指揮当番	24日	ピーメン松島	
3日	マリア松島	31日	マリア松島
17日	エレナ広石		

※至聖三者聖セルギイ修道院の至聖三者聖堂の聖体礼儀の実況録音を実費500円にて頒布しています。お申し込みは教会まで。

聖歌練習

♪名古屋:毎主日の聖体礼儀後に、その日気づいたこと、「聖体礼儀」の練習を中心に行います。

8月10日の代式祈祷後に、発声練習や音程など、基礎練習から行います。とくに初心者の方に向けて初歩から指導しています。ご参加ください。

♪半田:8月20日(水)11:45分頃から。聖体礼儀を中心に練習します。ユニゾン(単音)できれいにそろえる練習をします。ユニゾンでそろうようになったら、3度のハーモニーもつけてゆきます。



聖詠に親しむ

33聖詠 (34詩編) 9節

味わえよ、
主のいかに仁慈なるを見ん

この聖詠は「生命に至る道を選択するか」と問いかけています。

私たちは洗礼の時、「悪魔を棄てるか」と問われ、「棄てます」と宣言しました。続いて「ハリストスに配合（一致）するか」と問われ「配合する」と答え、「生命に至る道」を選択しました。

キリスト教徒の人生は一生をかけて、神の方へ向う人生です。手本はイイスス・ハリストスです。しかしイイススに倣う人生は、十字架を背負う人生で、たやすい生き方ではありません。教会に通っていても、次から次から困難がやってきます。

そんなとき、悪魔は次々と「人生楽しまなくちゃ」「あほらしい、しんどいことやめたら」「教会なんて偽善だよ」と誘いかけます。

悪魔の執拗な誘いを振り切るにはどうしたらよいでしょう。教会は「いつも祈りなさい」と教えます。ハリストスご自身も、何度も祈りました。聖使徒パウエルも「常に祈りなさい（ローマ12:12）」と教えています。修道の聖人たちは眠らず祈れ、いつでもどこでも、何をするときにも祈れと教えます。

聖詠作者も「我何れの時にも主を讃め揚げん、彼を讃むるは恒に我が口に在り

(どのようなときも私は主を讃え、私の口は絶えること

なく讚美を歌う)」と歌い、「我とともに主を尊め、ともに彼の名を崇め讃めん」と呼びかけます。そして主を求めて祈るとき、主は答え、恐れから助け出し、栄光の道を示してくれるだろうと教えます。

「味わえよ、主のいかに仁慈なるを見ん（主の恵み深きことを味わい知れ）33:9*」

主イイススは神と人が和解するために自らを献げ、そのお体と血が私たちに与えられます。私たちはご聖体を受け、「味わい」、主の憐れみを知ります。ご聖体は「生命への道」を歩むための日ごとの糧です。

この句は今では先備聖体礼儀の領聖の時に歌われますが、最も古い領聖詞で、4-5世紀ごろからご聖体を頂くときに歌われていたという記録があります。

ではご聖体を頂いた私たちはどのように生きて行けばよいでしょう。聖詠の後半は、そのためのアドバイスです。「爾の舌をより、爾の口を偽りの言葉より止めよ。悪を避けて善を行い、和平を尋ねて之に従え」と教え、痛悔の心を求め、主に従う人には災いが重なるが、主はそのすべてから救い出し、骨の一本も損なわれることがないように護って下さるだろうと語りま

す。聖使徒ペートルも第1の手紙の中でこの箇所を引用しています。「命を愛し、幸せな日々を過ごしたい人は、舌を制して、悪を言わず、唇を閉じて、偽りを語らず、悪から遠ざかり、善を行い、和平を願って、これを追い求めよ。主の目は正しい者に注がれ、主の耳は彼らの祈りに傾けられる。（1ペトル3:10）」

「天の糧」「生命の爵」であるご聖体を頂き、力を得て、十字架を背負い、歩み続ける、それが洗礼の時、神に約束した人生です。

日本では行われていませんが、この第33聖詠は晩課の終わりに1から10節が、またロシアの習慣では聖体礼儀の終わりに全文が唱えられます。領聖と祈りを中心としたキリスト教徒の生活に密着した聖詠ととらえられているのがわかります。

注*日本では先備聖体礼儀の領聖詞は「天の糧と生命の爵を」を付け加えて歌われているが、外国の祈禱書や連接歌集では「味わえよ、主のいかに仁慈なるを見ん」のみ



参考資料:『聖詠経』、口語訳聖書『詩編』、*Christ in the salms* Patrick Henry Readon, *Orthodox Study Bible*, 正教基礎講座テキスト『奉神礼』(トマス・ホブコ神父)、*The Late Byzantine and Slavonic Communion cycle: Liturgy and music*, Dimitri E. Conomos, Dumbarton Oaks Studies Twenty one

ホームページのご案内

○「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が開けます。「聖歌だより」のバックナンバーもダウンロードできます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>
詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgia> 奉神礼や聖歌の実践資料